

生態学的知覚論とホワイトヘッド

平田一郎

関西外国語大学短期大学部

J. J. ギブソン(1904-1979)の生態学的知覚論は、知覚論としては直接知覚論やアフォーダンスといった重要な考え方を提起すると共に、基本的な自然観、存在論としては環境と動物との相互関係性の強調、特に過程的な存在論に立っている。そしてこのような生命を重視した過程的存在論や、環境、生態系などとの相関関係に基づくことで、A. N. ホワイトヘッドも(1861-1947)またギブソンに通じる世界観を提示している。

もっともあくまでもギブソンは心理学者としての研究をなしたのであり、その際ホワイトヘッドの影響を受けた形跡はない。さらに現在のホワイトヘッド哲学の研究者の側もまた、ギブソンの直接知覚論やアフォーダンスを入れる余地のない自然像をホワイトヘッドのものとした上で、その現代的意義を強調している。

そこでのポイントはホワイトヘッドの究極的要素たる「現実的存在」(actual entity)と呼ばれる生起の解釈による。この現実的存在について通常ホワイトヘッド研究者は、サブアトミックは大きさの微細な存在のみとした。すると知覚についても外物を構成する微細な生起が大気の微細な生起の生成を引き起こし、そういった生起の生成の伝達が感覚器官における微細な生起を引き起こし、それが神経系統における微細な生起へと連なり、最終的に脳髄の中の微細な生起が「机を知覚する」という経験の生起として生じる、ということになる。

この最後の「統括的生起」こそ、知覚に置ける終点としての脳髄の電磁的事象であり、知覚する心とはまさにこの生起に他ならないとする。その限りでホワイトヘッドの哲学を、積極的に近年の認知科学における脳の神経生理学での諸議論と結び合わせて、そこにホワイトヘッドの哲学の現代的意義を見出そうとする研究が主流となるⁱ。

こういった解釈に立つ時、ホワイトヘッドの研究者はギブソンの生態学的知覚論に対して否定的にならざるをえない。実際カツコは、アフォーダンスや生態学的知覚論が前面に出てくる前の時代のギブソンの議論の方がより有用であると主張するⁱⁱ。ここではギブソンは古典的な網膜への物理的刺激を批判して、視覚への刺激作用が点的なものではなく外界に一致するといった議論をしている。これは後の情報の客観的実在につながる議論であるが、精神物理学として感覚器官への物理的刺激がどのように知覚へ情報として入っているのかという部分を議論している。それゆえこれを、知覚物から感覚器官への生起の連なりの議論として、知覚の終点—脳髄の中の生起を入れる余地がある。実際カツコは形而上学としてその終点を議論しているところに、精神物理学の時代のギブソンに対するホワイトヘッドの優位を主張している。

しかし本当にホワイトヘッド哲学はギブソンの生態学的知覚論と相いれないのであろうか。環境と生物の相互関係や自然の側での効用や意味の実在などむしろホワイトヘッド哲学の根底をなす考え方と一致している。ここで問題は現実的存在をミクロな

存在のみとする従来の解釈であろう。それゆえわれわれはむしろミクロな存在と共に、マクロな日常的な存在も現実的存在であるとするウォラックの解釈に立ちたいⁱⁱⁱ。そしてそのように考えれば脳髄の中の生起と共に、ギブソンの直接知覚もまた一つの現実的存在と見なす可能性がでてくる。これはギブソンであれば「入れ子状」という言い方をした自然のミクロな存在とマクロな存在との関係に一致する。

問題はこの「入れ子状」ということが具体的にどのようなものであるのかということである。このことについて、発表者はゴールドマンの複数の行為を同時にすることと類比的に現実的存在の重ね合わせについて論じた^{iv}。即ちホワイトヘッドにおいては直接知覚も脳の電磁的生起も重ね合わせてあるのである。そしてそれらの重ね合わせは、ゴールドマンのレベル生成と異なり、因果的關係と見なせる。ここでホワイトヘッドにおいて因果關係による区分と時空關係の区分が異なっているということが重要になってくる。原因と結果が必ずしも隣接せずとも、例えば包含關係にあるもの同士の間でも因果關係がなりたつ。即ち知覚物から脳の生起に至る時空的広がりを持つ直接知覚が、その一部である脳の電磁的生起を引き起こすと考えることができる。

無論ホワイトヘッド的枠組みではこの直接知覚が知覚物から感覚器官までの情報伝達を引き起こすし、あるいは従来の解釈が主張するようなミクロな生起同士の隣接する因果關係も許容する。それら多様な大きさの、包含や隣接といった多様な關係をもった多くの生起が現実的存在として相互に關係しつつ重なり合っている、そういった自然像をホワイトヘッドは示しているのではないのか。その限りで確かにホワイトヘッドは存在論、形而上学としてギブソンの環境と動物との相互作用といった自然像を含みながら、それを超えたより包括的な自然像を提示していると言える。

このようにホワイトヘッド哲学から生態学的知覚論を考察する場合、諸々の客観的に実在する情報の中からどうしてこれをピックアップしたのかといった「特定化」の問題についても興味深い論点が出るかもしれない。ホワイトヘッドにおいては、主体は客体に順応するという客主構造が主張され、決して主体の能動性を主張しないという点で、生態学的知覚論のエコロジカル・ターンに一致する。しかし同時にそういった客体は現実的であることを止めた可能性の束であり、現実的存在は活動(act)としてそういった可能性を現実化する。これが「特定化」ということではないのか。そしてそれは、ノエのエナクティヴィズムにおけるアフオーダンスについての論点とも一致する。即ち可能態の現実化という点で生態学的知覚論とエナクティヴィズムとをホワイトヘッドはつなげることになるのである。

ⁱ Weber, M. and Weekes, A.(ed.)(2009) *Process Approaches to Consciousness in Physiology, Neuroscience, and Philosophy of Mind*, Albany: State University of New York Press.

ⁱⁱ Katzko, M.W. (2007) "A Process Interpretation of James Gibson's Theory of perception" in Riffert, F. *Perception Reconsidered*, Frankfurt am Mein: Peter lang, pp.189-207

ⁱⁱⁱ Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, Albany: State University of New York Press.

^{iv} 平田一郎 (2016) 「ホワイトヘッドのコスモロジーにおける『行為』の遍在性について」『研究論集』第 103 号, 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部, pp.1-21